

松岡光治編『ギッシングの世界 - 全体像の解明をめざして(没後 100 年記念)』

(Mitsuharu Matsuoka, ed., *The World of Gissing: In the Year of the Centenary*)

(xxvi+405 頁, 英宝社, 2003 年 12 月, 本体価格 4,000 円)

(評) 吉田朱美

今日の読者である私たちがディケンズの作品に対して、基本的な解釈の枠組みというようなものをもっているとしたら、それはどのようにできあがってきたものなのか。「ディケンズについて、いまでは『常識』となっていることで、ギッシングによって初めて指摘されたことが、かなり多いのではあるまいか」 - 小池滋氏は、松岡光治編の『ギッシングの世界』の「ギッシングとディケンズ」と題された章で、こういってディケンズ批評へのギッシングの貢献を再評価する。小池氏が金山亮太氏と 1988 年にギッシングの『チャールズ・ディケンズ論』を翻訳したとき、とくに独創的な点のない常識的な本をなぜ今さら訳すのか、との批判を受けたという。だが、この今や「常識」とされるような読みこそが、ギッシングの時代にはまさに独創的であったのだ、というのが小池氏の指摘である。ギッシングの「人と作品を時間の順でたどっていく」のではなく「さまざまなテーマで切り取って行く『共時的』」な批評スタイル、あるいはディケンズの作品を他のヨーロッパ諸国の作家たちと比較して論じたことなどは、当時としては前例のない新たな批評の試みだった。また、ディケンズの「作家としての長所」とともに、中産階級に属していた彼が労働者階級を十分に描ききれなかったという「限界」を指摘したのもまたギッシングなのだ。

ディケンズを若いときは「乗り越えるべき敵」、やがては「創作の喜びと悲しみを分かち合う仲間」とみなすにいたったというギッシング自身の小説世界とは、それではどのようなものであったのか。彼の没後 100 年を記念して刊行された『ギッシングの世界 - 全体像の解明をめざして』は、題名にたがわず、ギッシングという作家の全貌に迫ろうとする本である。この本にはまた、これからギッシングの世界を研究しようという読者にとっての手引き書として、さまざまな工夫がほどこされている。まず、ジェイコブ・コールグ氏による「ギッシングの生涯」の記述が、伝記的事実と作品についての基礎知識を与えてくれる。それに続くピエール・クスティヤス氏の「没後 100 年間におけるギッシング批評の進展」と、巻末の松岡氏による「ギッシング関連情報」とを合わせて読めば、現在に至るまでのギッシング批評の流れ、関連文献についての情報が見てとれるという仕組みである。

本書の中心におかれているのは、既に日本語訳の存在するギッシングの諸作品についての、国内の研究者による論考の部分である。それぞれの作品論の前には、便利な「作品の梗概」がまとめられている。(さらには、各論で取り上げられなかった他のすべての作品に

ついても、コールグ氏の手による梗概と解説を読むことができる。) 一人の執筆者につき一作品、各々独自の観点からなされた分析が、一冊の書物に総合されて、一人の作家のさまざまな側面を炙り出し、共著という形式のもつ強みを発揮することに成功している。このようなスタイルで編まれた書物であるから、全体に通底するトーンなどというものを語るのは見当違いかもしれない。しかし、ギッシングに対する文学理論家たちの方法論的な「再接近」に批判的であるクスティヤス氏が、資料によって十分に立証された論文のほうを評価する、との基調を打ち出しているのと呼応するように、作品論を担当する各執筆者の、後期ヴィクトリア朝という時代およびその文化に対する鋭い意識と、ギッシングという作家個人に対する豊富な知識とに基づいて展開された読みの数々が際立つ、ということはいえよう。そして、ギッシングという一人の作家の多面的な・多彩な小説世界のさまが浮かび上がってくるのみならず、彼の作品の読みを深めることに付随して、当時の文学界の実情や、下層階級の生活、女性の自立をめぐる問題、遺伝学や進化論が投影された人間観など、後期ヴィクトリア朝の社会や文化を構成していた諸要素も、描き出され、解き明かされている。その点において本書は、ギッシングに限らず広くこの時代の小説を学ぼうという人にとっても、よき入門書たりえるのではなからうか。

『ヘンリー・ライクロフトの手記』の章を担当した加藤憲明氏のギッシング批評は、「とても不完全で、幅の狭い、小さなキャンバスに数少ない色彩で描く二流の作家であった」と辛口であるが、『ギッシングの世界』を一読しただけでも、ギッシングが小説というジャンルにもたらした新たな題材や境地は、十分な評価に値するものであるように思われる。ギッシングがディケンズの弱点として指摘していた労働者階級の描写において、自分自身の貧困地帯での生活の体験が、彼に「外部の人たちの想像だけでは書けないこと」を書くことを可能にしたと、倉持三郎氏が『ネザー・ワールド』についての論の中で述べているのは、その一例である。ギッシングの『民衆』という作品は、大規模な社会調査に基づいて『ロンドン市民の生活と労働』を著したチャールズ・ブースをして、「貧しい人々の生活についての信頼できる情報を与える数少ない小説のひとつ」と評せしめたという。もちろん、ギッシングの関心は、社会観察にとどまるものではなく、労働者の個性を発見し、彼らの人間関係を鮮明に描き出していくことにあるのだ。

当時の文学界を席卷していた進化論的な適者生存の原理にもとづく商業主義に翻弄され、あるいはそれを利用していく文人たちの姿を描いた『三文文士』についての松岡氏の論が、「実利主義と理想主義」の対立に焦点を当てているのは、一見あたりまえの読み方と思われるかもしれない。しかし、氏の分析は、ギッシングが理想主義の中に見出した「傲慢さ」などの非人間的要素をあぶり出し、「ギッシングは理想主義者の擁護を最終的に放棄している」という結論を提示する。そこから、「ギッシングが最も感情移入した人物」は、物語の

前面に現れ、過去のギッシング自身の経験が投影されているように見える「理想主義者」の貧乏作家リアドンではなく、「現実主義者」のハロルド・ビッフェンなのではないか、という。これは従来の読みからすると新しく、評者には思いがけない指摘であった。だが、現実社会の中で理想に固執することの限界や問題点を認識しながらも、ギッシングの中には、現実を現実として割り切れない理想主義者の部分、リアドンの部分もやはり共存していたことは否定できないのではなからうか。以下の松岡氏の分析も、ギッシングのリアドンの理想主義への共感を裏付ける。「労働者階級の教育がギッシングの冷笑を買うのは、それが文学のための文学に従事するリアドンの理想主義ではなく、金のために文学を生業とするミルヴェインの実利主義を反映しているからに他ならない」。しかし、この同じギッシングが、『サーザ』においては、理想主義に基づく労働者教育の試みの挫折を、たしかに現実主義的な視点から批判的に描いているのも事実である。コールグ氏は、「理想とは、流れ星のごとく手の届かないものであることをギッシングは知っていた」というクスティヤス氏の指摘を引用しているが、到達できないと知りつつも理想を手放すことのできなかったギッシングの揺らぎこそが、松岡氏の指摘する彼の小説全般の「曖昧性」につながるであろう。提示した問題の数々に結論を与えることのできない彼の「どっちつかず」さは、その小説世界の読解可能性に深みを与えるものでこそあれ、必ずしも欠点と見なされるべきではない。

『流謫の地に生まれて』は、秀でた知性を持ちながらも、下層中流階級を抜け出すのに苦心し、上流階級出身の元同級生の妹との結婚を画策する中で自らの信仰を偽ってしまうゴドウィン・ピークを主人公とする。この、もともとの出身階層から離脱したものの、その上の階層に受け入れられる手だてもなく、行き場を失った主人公を読み解くのに、金山亮太氏は当時の進化論や遺伝学、特に、この作品を執筆する前にギッシングが読んだという『心理学的遺伝』という書物を導入している。「生まれより育ちは勝るのか」という切り口は、ゴドウィンが自分をかつては「選ばれた者」と考え、教育による遺伝性向の改善可能性に一縷の望みをかけ、最後には「劣悪な資質を払拭することができなかった」と絶望するといった、変動する自己認識の軸となる背景を照らし出していて、実に興味深い。

中流階級の女性が社会の中でおかれていた状況を描く『余計者の女たち』の中で、武田美保子氏は夜の街を一人歩きするモニカの身体のもつ「境界性」に光を当てる。そして、女性ヴァイオリニストを主人公とする『渦』もまた、変わりつつあった社会の中の女性像、家族像を描き出している。『渦』の章を担当した太田良子氏は、アルマの直面した「家庭か、キャリアか」という問題に注目しながらも、「『渦』は世紀末のイギリスが抱えていた社会問題が前面にしゃしゃり出る小説ではない」とし、その先にある『渦』のテーマとして「姦通の問題」をあげ、『マダム・ボヴァリー』と比較している。これは面白い比較であるが、

マダム・ボヴァリーにとっては、心の空隙を満たすための姦通であったのに対し、新しい時代のヒロインのアルマの場合は、男性によって自己を満たそうとするのではなく、欲しているのはあくまでも世間的な名声を得ての、音楽家としての自己実現であり、姦通の誘惑はむしろそれに付随しておこってきたものであるように、ギッシングと音楽の問題を考察してきた評者には思える。芸術を商品と割り切ることのできる者だけが生き残る商業主義のもとでの「芸術家の疎外」は松岡氏によって分析されているところであるが、『渦』では、自分自身をも商品としなければならない女性芸術家の疎外が描かれているといえよう。

『埋火』という小説で、ギッシングの作品の中では例外的に「現世謳歌主義」が勝ちをしめているのはなぜか。小宮彩加氏はそれを、当時のギッシングが愛読していたオマール・ハイヤームの影響によって説明する。ハイヤームの作品が世紀末にかけて英国で人気を得ていった経緯が語られるが、当時の中心人物が多く含まれていたオマール・ハイヤーム・クラブに、ギッシングはまさに『埋火』執筆の年（1895年）、入会を許されたという。小宮氏がギッシングの小説世界全体に共通する要素として指摘している、「過去」（個人が歩んできた人生ではなく、ギリシャ・ローマ古典期という特定の時代）と「現在」という、対立し合う二つの時間意識の問題は示唆に富んでいる。このような時間意識はギッシングの豊かな読書経験に基づく古典の教養によって獲得されたものであるが、小宮氏の論考はそのような過去と現在との間の往来が頻繁にみられる『イオニア海のほとり』についての並木幸充氏の論と合わせて読むと面白い。

「日本で10冊以上の長篇・中篇の作品が翻訳されているヴィクトリア朝作家は、ディケンズ、ウィルキー・コリンズ、ハーディ、そしてギッシングだけである」と松岡氏は「まえがき」で語る。小池氏責任編集のシリーズなどのおかげで、ギッシングの作品は、日本語でも親しみやすい存在となっている。しかし、ギッシングの小説世界の全体を包括的に扱った研究書の数は、これまで五指に満たないようだ。『ギッシングの世界』は、現在におけるギッシング批評の動向をふまえ、久々に編まれた貴重な書物である。通読するのも良いが、参考書として、ギッシングに関する情報満載の事典としても価値が高いと思う。ギッシングに関心を持つ人々が、この本と出会い、または、この本をきっかけにギッシングへの関心を深めた人々が、ギッシングのテキストと向かい合い、そこから数々の、新しい読みが生まれてくることが大いに期待される。